



近世怪談霜夜星四卷



第六回

編ご幕の狂人
古屋の木まろ

東都

種彦著

このときさたりしもの別人あはれ末次郎が掣鞋作助主人のそと
かたをさかひ病交けくもり頭痛をいで花巻へといくぐり。土まの
下み人殺ことゆひと躁動あり。何竟やんと足がらふまか
洗鏡肩尖をかきく柳の樹ふましくとたり枝をさ
のかじりあり。あつとまるとまるとのい何地の人あんとまの雲
月の夜とあつたやうりれば冷瀧さる影ふましくしえるふ山
主人末次郎鮮血ふまされ伏たりれば作助愕然とらちをさる天を

あつとまるとまると

あつとまるとまると

あつとまるとまると



さくすけら
 いそぐあ
 らさんご
 あゆりけんを
 うちてたあ
 りく

さくすけ

宿屋 尾巻 二回



とつこまぶらま
 こいかない
 けんとどの

尾巻 二回

仰る地をたき泣く津波なく叫ぶ声はし。あの發塘あつく並隣の人。あま
不捧りたさびしくともあつたりねば。その縁故いさうされども。此死骸の
つが主人あるはしをいひとねく。求次郎が亡骸をいふあさうへくし。
先縁由花方の家不志し。そのら鬼も角もとを議とべしとあさう。
おさあくと立あがねば。遠寺の鐘声殿々として。會者定離を告柳卷
ふかいたるらん。琴弦の音ふまら。稲書い如露亦如電のよかるねを我
に志あけくとおろひて。夢ふゆりえん。紅持あまどかしくいへて。いと
あまく須寄（が）かえりも。此書ふあがうらざる。度あがう因不記を。
あの巴屋津島は三代ありく。二代目の妓殊ふらうらぐ人さしく。
そのが恋ふ島の一文字をころ。鳥山と名づ。茶花娘あれど。後
代全盛のよあさあり。いさう津島は初代ありく。名をせはめしと

いふ津島はたふあ。おのろやあられ。津島せんああとうさひしい。
あの妓の度ありとど。あまのさくま。巴屋あありし金吾の漸々。曉不
かうびと目覺求次郎がざあねふいぐりう。かえり来ぬし。を何地
の花不志やあし。らんあど。みりひわ。あうは。日本堤ふ人殺ありと
まとのと街説とあり。相花の往来いふふ。かまづ。財具。あまら。雑
戸。あまの。水あまふ。あま。傳説。あまら。を。金吾何とあまら。ん。頭
突。あまら。は。し。れ。ば。い。さ。う。巴。屋。の。橋。を。さ。さ。う。三。谷。の。方。へ。行。え。れ。ば。津。島。へ。
求次郎の身體づつ。あまらとありとあ。鮮血ふまら。れ。て。あまら。の。人。
あれど。金吾が羽織を穿て。あまら。は。あ。が。う。べ。う。と。あ。く。金吾の一日。あまら。
うり。あまら。あまら。の。あまら。言。あまら。い。さ。う。せん。説。あまら。
い。さ。う。の。あまら。に。何。人。の。所。為。あまら。せ。ま。あまら。あまら。あまら。あまら。あまら。あまら。

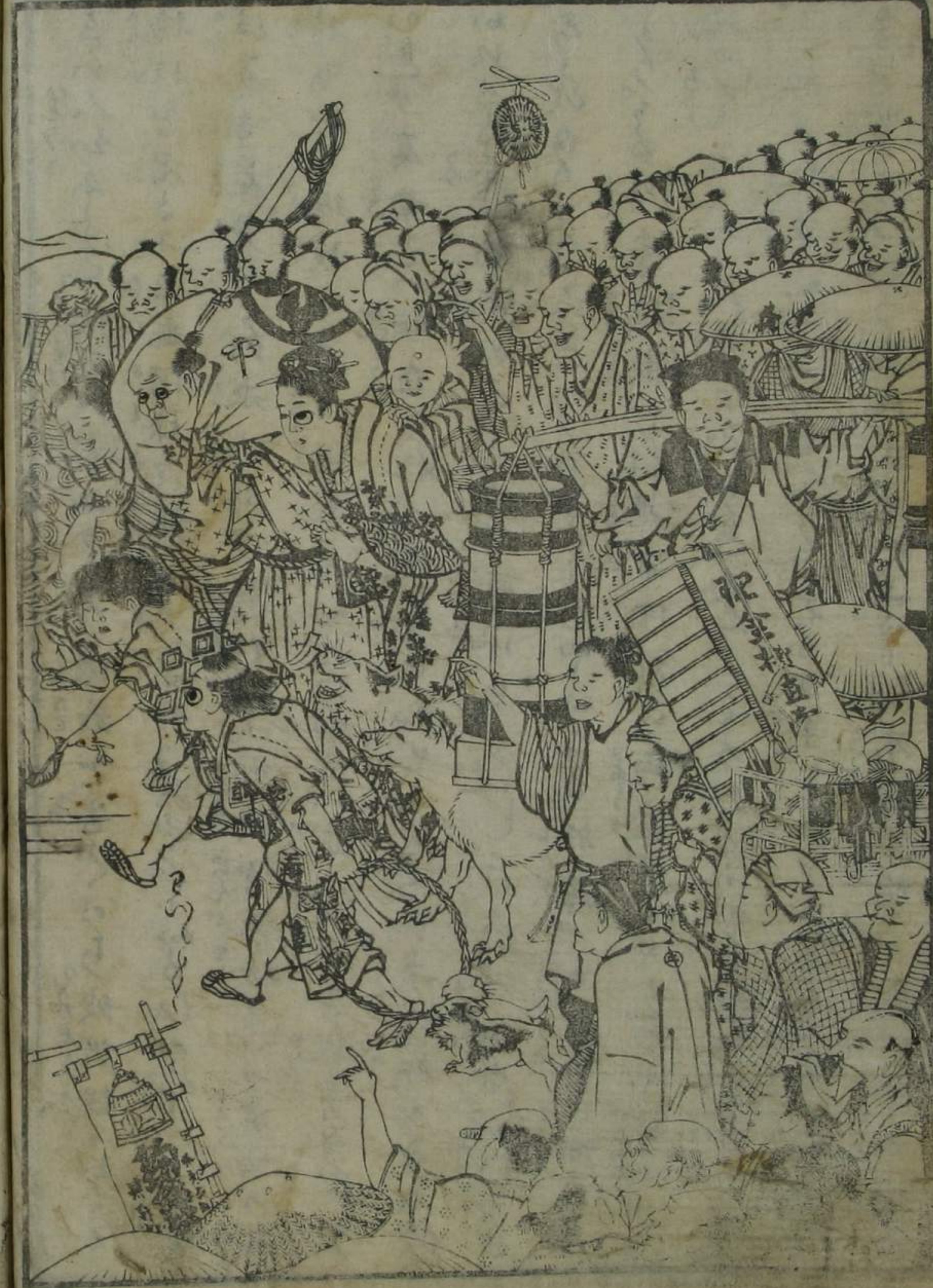
の家イヌのいたり何ナニと分わか説せつる次つぎべと。石いし斗とそのののばせしあやある。
衆しゆをかへるこさへ志し路ろゆく人ひとむいひさの私わづ言ことのといふと。
遂つひ不ふ狂きやう氣きもあけくみあつと。あまの泣なみあまの笑わらひあまのくを
まひせむやのまひびとらなひつ。編あみご帯おびを肩かたふかけ。志し賀が山やまが
かどろぢりしと一日いちにち二日ふたにちさむらひ。街まち上うへの笑わら語ごとありし。伏ふし保ぼが
許ゆるりも此この度たびを因より。中なかのぬえとふありひ。人ひとをいじてさう
けくしとど。いふ彼かの所ところをさうし。今日けふの此この所ところもさうあると。
街まち説せつふとくのみさく。遂つひ不ふ尋じんあつと。三日さんじつめの夕ゆふ浅あさ草くさらう牛うし嶋じま
ふりける。酒さけ場ばあつと。狂きやう死し不ふぢぢ亡なふり。求もと次つぐ郎らう金かね五ごの家いえをつく
づと子こあり。伏ふし保ぼの金かね五ご不ふ別わかくさう。近きん迎えんの寺てら院いんへひにあらう。衆しゆ
門かどとあり。はが重おもく。愁なみだひあやつくほど。死したる。さうたれと。

き人ひとむいしと作つく助すけの家いえむらう。棟むね敷しきを告つぐら。彼かの鏡かがみ不ふおこも。
掃はき枝えをさる。南なん無む阿あ弥あ佛ぶつの文ぶん字じあり。つぐかりひわらう。近きん曾そう
法ほふ善ぜん寺てら花はな見みの。求もと次つぐ郎らう誘いざなひ。卯う月げつ官くわん太たい夫ぶとつ。處ちよ士しつ。牙あは
持もちるせし掃はき枝えも。作つく助すけも兄あにかほ。あまの求もと次つぐ郎らうを殺ころ害がいるせし。い
ひとが為な業ごうと。明あき白はくなれど。復また讒ざんのむもあらうや。求もと次つぐ郎らうがさう。
かれらる金かね一いち百ひゃく兩りやうぬせと。雨あめ風かぜのまげし。さあ亡な命いのちを。けがこ
まひびたり。あまのいさるさうや。か。於お釋しやくが女むすめの性せいの慳けんらう
らう。その怨えん氣き猶なほ識しび。花はな方かた伊い蓋がいの雨あめ衆しゆ。さうがうら。不ふ割わり延えん。
此この一度いちどを人ひとつと。歩あしむ。さあ。あまのあまのふま。あまの者ものもあ
主あ顔かほ不ふ乱らん草くさあまのさう。さう。筆ふでをふ。さう。のら。求もと次つぐ郎らうが
舎やを買かひと。ある。医い師しさ。さう。さう。木き枕まくらの怪あやとありし。と。白しろ蛾がが



とよかいあびの
ころり物とほやま
やきよけたまへし
まことくまのくつ

霜夜長巻之四



霜夜長巻之四

第七回 鎌倉の怪変
空ぐるは

かゝるうと少えし。御所跡菅領館あどあど土人よむをそそぐ。此
 所あつし彼まよりしと物語とど皆田圃のともあつくと。実やら
 も本もあむびに秋のおとそとく空いた芽をそらふやあやのやと
 詠せしも宜あり。さうとど驛路市町のよだりひの古み倍し。旅店所
 せれまぐ棟をまどへ諸国の高客あふあやまり。美酒海鮮一とじく
 かりとも夏あ。水結く山麓ささ平安の地ともいふへ。彼伊去保が
 ト居をりとしれ。さうとど街の遠ざかりうらうらひ松葉が谷扇が谷不續
 也。前山山川のあまもあつくと。掛樋の水人力をかうむ花不雪不風水ら

一つの草庵あり。常言とよまめも夏あれば寒をいせれ冬されば暑をい
 らふ。去年こぞの末次郎が横死よこしう伊去保の家もさえ伊去保の大風を死
 やうひあそ世をさうしと。於澤あざがうらうと勢あふ。年月としとさう行
 むつと。やうやくまうをやまんぐるじり。頃ときの神無月かみなしづきさう
 孟冬もうとうありらるが。伊去保いしごほ於花かの二人の愛子あいことてのふ棟先むねさきありて詠
 とへ。金鳥かねたうの西山やま小径せみ。玉兔たまうさぎの移戸うつりどの杜とのさうとく。戸とは清水しみず情なさけの
 さびと。なほとらうらう立ちゆく。虚空こらうをうらうらるる。小絳せう雲蝶うんてつ小松せうと
 魚鱗ういしんのどくつとあり。大ふかりしををえぬ。不斗ふと伊去保いしごほ於花か
 むらうと。さうとらうらうのとももひりうとく。彼伊去保あしごほがか誰たれも居いりし
 とれ。珠たまの清きよ水みづの精せいの情なさけのうらうらとさうらひ色いろされね。花子はなこのうらうら
 へとさうらうと女めづ肆しふあ。いと。帳とれ子ことあうらふへ。あつらぬ人ひとも笑わらを

宵夜星巻の四

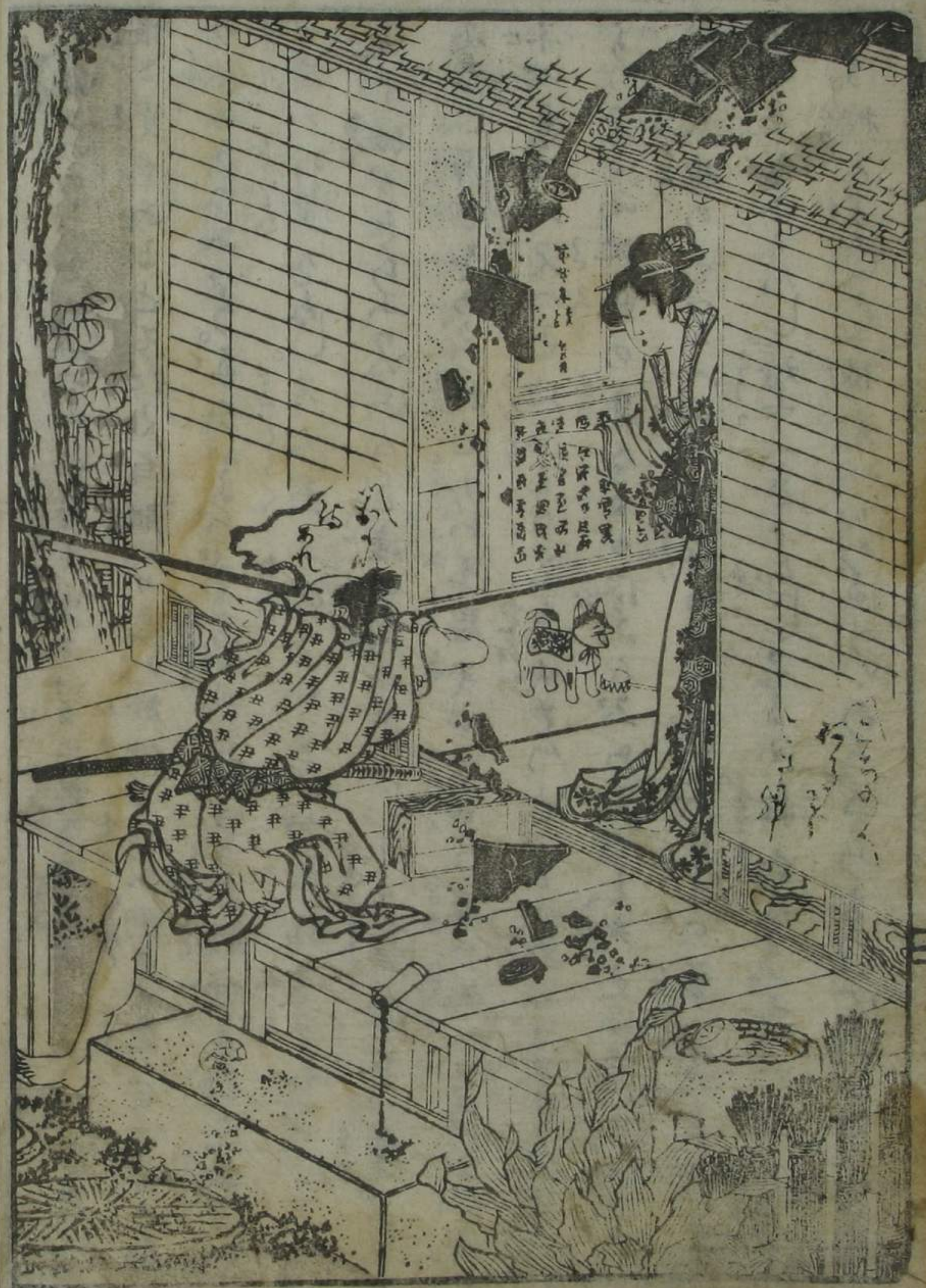
三

りくふしせうふた 芭せうふたふらく客きやくをまねぐんとあしるふ。今いまひくひらみひら
 情人せうじんふ横陳よこぢんなし。愛あい子を二人ふたりかどぐりふけし。砂すなの中にひくひら玉たまふや
 あるらめといひひら色いろが。伊いま清せいらちりひひ既すでふ常言じょうごんも明珠めいしゆ連城れんじやう
 たうらふあつた。子孫しそんをりく室むろとひ。愛あい子の深ふかく末すえをいふし
 らひなしといひうら。とや幼子せうしがあひみく。於お村むらの花はなふらうのた
 母ははさやねうらうらうらふ。ねうしとくくとあやゆと於お花はな悦よろこむ
 かむを誘いざなひ。棟房むねふふらうれど伊いま清せいはる母ははさやある影かげ
 ふらぐ。月つきのむらうをうらうねく。柱はしらふおらうとありらる。柴しばの戸と
 がを何なにとくくとくたかた喧かまふのあり。いと怪あやしく他人たにんあるごとくひ
 けらなり。爰こゝ用もちくく。ゆめあうさんとありと答こたへ正ただしく女おんなの
 言ことあり。伊いま清せい訝あやりあう庭にわふあうら。行ゆ折や戸とあひひらひ。丈ぢ

ある黒くろ髪かみをおどろしく。あうとく。青あおざらる。女おんな紡紡渾まじとく。ぎ
 居いら。京きやう来らい石いし敵てきの伊いま清せい何なに者ものありやとく。荒あらい風かぜ木きの梢さかを
 らえ村むら雲うみふからとく。月つきのめとく。銀ぎんこる荒あらい風かぜ木きの梢さかを
 あうのらう。水みづ洒しとしくうらうら。さうくと言ことしく柴しば折や戸とを
 さとびひをくひ床とこへのある足音あしなのあ。且かつく姿すがたひ目めあうら
 び。伊いま清せいあう。鬼おに穴あな椽せん先まへふらうら。伊いま清せいひふらう。夫おとこ卿きやう御ご
 代しろ辭ことば篇へんふ。野の狐こ觸ふ體たいをいふ。北きた斗とを百ひゃく礼れいしく。婦つま人の形かたちと化くわく。こ
 酉うし陽やう雜ざ俎そふ。狐こ尾びをうらう。火ひをいふ。記しり。此こゝ地ちの南みなみへ。我われ折や戸と柄へい
 関せきの八はち重じゆう山さん嶽たけとく。又また瞿くわ麦まきあう。諸しよ越えつ原げんとく。荒あらい野のは。関せき
 と遠とほうら。ね。狐こ裡らのり。さうら。ひも知るべし。と。四し壁へきをさうら
 兄あに中ちゆうら。先まへの女おんなの伊いま清せいうらう。と。後ご堂だうふら。顔かほさうら。げ。え。

あつちのうらみ
あつちのうらみ
あつちのうらみ
あつちのうらみ
あつちのうらみ
あつちのうらみ
あつちのうらみ
あつちのうらみ
あつちのうらみ
あつちのうらみ

あつちのうらみ



あつちのうらみ

物まが
 こしら
 物まが
 こしら
 物まが
 こしら
 物まが
 こしら



不
 不
 不
 不
 不
 不
 不

往年仲人志たる。散次が鮮首。眼へ半ひらひて死もやらば。水をのこ
 魚のどく口をうぶらして居ら。伊去清ハ惣身の毛一度も木林
 堅。あまの者のあまの氣もさう失ふべし。しを漸々ふむをまづめ
 散次が首をとろく。小午銃の齋尾もらう。泉水へまづめぬ。於花
 しいまの筒音ふかどらね。ねやをさう歩くと故根を向べ。白地も語
 らばかきとやせん。と。栖まらひし。小鳥の月あらししをうらとらん
 とあせしありと答れば。於花うらうらひ。一時の戯も愛子の目や
 さよさんと。ゆをさうさうと。戸ふいるか。王。悦五郎阿と叫ぶ夫婦
 周章と寝衣をさぬ。いつかかきとや息もさえぐ。わく。さう
 と。乱言をつひ。ほどもあう。死うやまれば。か花へ只伏轉びく。正休
 あり。伊去清もさうさう。始夕の夏どもかひひらぐら。れ。ふ。さう。又。澤子

か亡霊のつごあめり。と。悦五郎が死負うらえる。小往年蛇の吐さうし。
 花が形見の簪めく。口の中う。咽骨をつらぬ。ら。り。小遠が
 めく死霊の所業。と。拳を握。と。憤る。ふ。又。側。小陽。冬。の。く。澤子
 が。鬼。あ。ら。う。さ。い。と。さ。も。ら。う。と。あ。ま。さ。あ。り。し。と。悦。五。郎。が。死。負。う。ら
 かり。莞余とあせば。伊去清。怒氣を志のびむ。佩刀をのびく。さう
 かも。小。只。霞。を。さ。う。煙。を。突。が。ど。し。花。子。が。目。あ。ひ。彼。死。霊。あ。ら。う。と
 ええざれば。故もあら。小伊去清。刀をのびく。さう。ら。ふ。愛。子。一。人。失
 ひし。さ。い。ふ。さ。う。狂。氣。あ。せ。し。と。お。り。ひ。良。人。を。ま。づ。め。死。悦。五。郎
 死。さ。う。と。も。か。村。へ。不。便。と。お。お。さ。ぬ。あ。や。と。ひ。さ。ふ。る。押。と。れ。ん。と。し。も
 ちうと柄。り。と。さ。う。伊。去。清。の。己。が。刀。み。く。の。ま。と。耳。の。ね。入。疵。を。う。け
 たり。花。へ。さ。う。び。お。ら。ね。い。ん。せん。く。と。泣。ま。い。ふ。残。瘡。を。れ。ば。あ。げ。さ

おどろくともあれと布あそく捲戻もありたまれりしは悦五郎を野辺送
りまし夕一庁の煙をほしてぬがてりり伊去請花子の鬱として
更みあゝも懐の痒を棄て林の花を窺ふらうせしおひきられ
村兒がたつらふあるをんく。うきをや住吉の岬におよて萱草
あゝ。二月三月ほどしり。彼伊去請が創瘡をうらわれ。日あびして
全く瘡なれども何とやん痒をおぼへ漸々小腫あがり遂に腫物と成
医師をまねねくもせきしと何と名つくべきともおぼへてと答ふ
それうりも膏やをほごし桑を勅とどその験且と多く。今へ立居
まらぬふまうむ怪べ。まゝ一節の珍賣いごご。毎夜四更のあり
ほいとわらふあり。何方ともなく鼠數多ありまらう。伊去請う腫り
らうつらう膿汁をまじらふ。その心持うさといふまうりもなし。花子の

と奇怪なる夏ふわのし枕方ふありと鼠をわひまうりごご。まがも
痛堪う。かくある夜毎ふ。遂に伊去請が身軀爛穢とく
いのらも絶へざる。悲歎の中ふも花の一計をりふげ長櫓の
うらふ伊去請を伏せあり。息出の穴をらりあり側ふまうり。居
れ。まゝし鼠も来らざらじふむらうとび。五更のありほいと
あへる頃。あやうふ音もあざらじしゆえ。長櫓のみとをひらけらう
あくとまのりまじやといひつ伊去請をえらふ。萱討んや裡あ
鼠充満く白黒斑あるもの數まらう。いんせんと。のけ
が。外の荒ひとらふあらうと。忽陽冬のとれ女の
化す。外の方へららまら。お花の襟をとり水を洒る。おらげ
樹とらふ。お村此音あやおらにらん側ふ伏居らう。鼠跡をかりし

二
三
四
五
六
七
八
九
十



宋石室卷之四

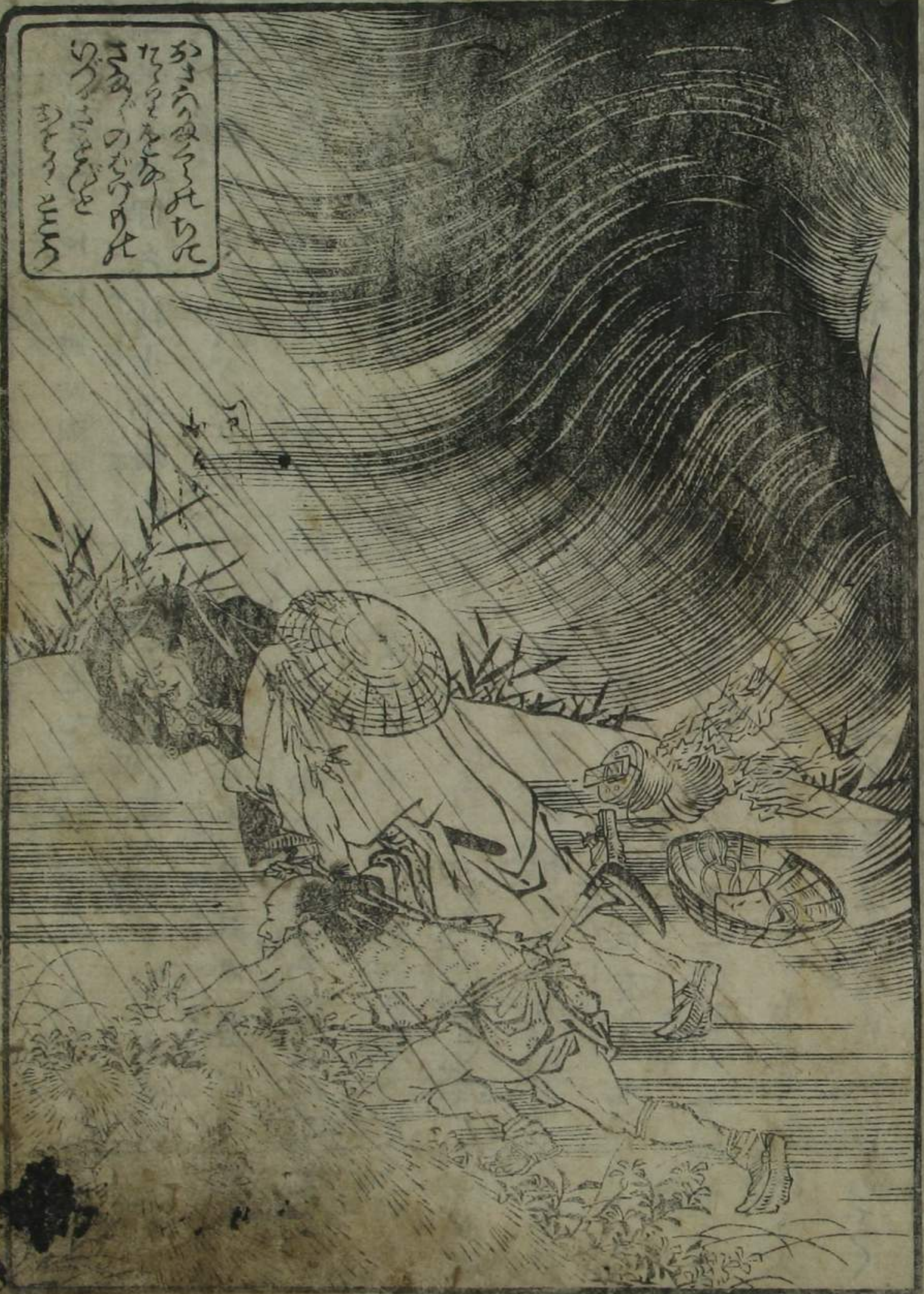


宋石室卷之四
宋石室卷之四
宋石室卷之四
宋石室卷之四
宋石室卷之四
宋石室卷之四
宋石室卷之四
宋石室卷之四
宋石室卷之四
宋石室卷之四

宋石室卷之四

の怪あり。悦五郎村兒が有りつゝ。よきと云ふ。澤子が亡霊の爲業。こ
 因果の道理必終つりと。つらざる。澤子が冤鬼あふと云く。いざ目
 さふらしむ。歎次が死首の夏あど一五十一をりのがら。かきぬそ
 いひの生もそや泉下鬼とあらんと遠くじ。自業自得のりふま
 とらう。歎次もそと詮をいひ。いざかあらう。此處不足をとまじ。
 尼法師とそとをうえ。諸国の灵場を順拜し。さひの上總国
 市原郡光明寺の歎の遺骸を葬らる。地なれば彼寺へつらう
 親子が後世を吊うとく。御佛の教ふ十悪五逆の極重罪も
 一念十念の称名の功あり。罪滅し。極樂往生あると云く。たの
 むと云く。とらると。いふらと。そとや香らう。憑きあつく。えへ
 けり。花のあちりのよふ言葉。さへ出や。袖を顔みわく。あてく。

とぞのるに居ら。かてのあ。そとと伊名。清み力をまえて
 つの良人のま。一個の武夫あり。日頃勇く。まれば性。似氣あれと
 を宜ひと。夏。己が心。かの色。身。崇をうくる。むと古さ
 物。詰も。少。と。皆を。足。を。又。か。む。を。い。れ。あ。げ。
 涙。く。し。介。抱。あ。の。む。を。さ。り。か。り。知。べ。か。村
 へ。花。不。い。の。ま。と。居。ら。し。顔。色。俄。ふ。ら。う。伊。名。清。が。面。を。ま
 ぢ。ら。も。ま。び。あ。り。覓。余。と。い。ひ。又。上。の。宣。ふ。懸。札。の。と。れ。簪。
 を。吐。き。し。小。蛇。の。が。の。と。く。み。や。と。い。ひ。あ。り。あ。り。あ。り。錦。の。腰
 帯。を。と。り。く。伊。名。清。が。膝。不。投。つ。と。色。の。奇。哉。忽。一。の。小。蛇。と。い。ひ。
 錦。の。文。の。鱗。の。む。く。紅。の。根。い。さ。ら。う。舌。を。吐。き。似。く。伊。名。清。の。口。
 不。ち。と。い。つ。れ。漸。々。不。締。つ。れ。ば。そ。と。く。面。不。朱。を。酒。さ。空。を。押。く。



おきりあつたれり
たつたをわ
さあ、のちりれ
り、さあ、さ
り、さあ、さ



おきりあつたれり
たつたをわ
さあ、のちりれ
り、さあ、さ
り、さあ、さ

宋夜皇者之四

ろろとつ。岡絶僻地周章死をなそを。か村微笑くほろびおお見
 かり。いふ伊去清水不濁とて死と。いづと苦しからんといひをり
 拾も橋をさそはぐ。二人一度不控と倒せ既不息とえ死うせ
 たり。そのとれ一團の鬼火陰くどく面の方へ出。いづとあ
 人声く今望も足さ。又明日の疾を来らめとかやくとつらふと
 花悲しと恐しと半死せる人のどく。いとをりふ声立と泣く母ふ
 所在もあ。結心のど成るがふれも定まる因縁あや。夜ありそり
 正氣つた。近鄰の人く不懺悔のそめと。有枝有葉をのり
 伊去湯が亡骸とりかこめんとあふ。前夜のうけ紐ゆる母首ふ
 とくくもあれぞ。村兒ハ俄不死されば身もあつとあやう。結る不
 かりぬ顔ハせをるる不ろく胸つと。花子ハ又も狂氣のどく

涙の間ふらり正しく。りや妻が身の上不恨る罪もあふあれ。その子ふ
 何の咎ありや。三途川ふちろひと。母よくととがねんふ。あはじ路あや
 かりむんと自害せんとあしりもを近鄰の人さまぐふつと和ん
 伊去湯村兒が柩をあらぶと寺院へかたり。彼伊去湯が遺言なれ
 べ。かかぬ命もあらと尼あり。菩提をとけつひとてか花ふ
 せられれば花子もその言葉をうけむと。又明日の夜ふを来らめとつ
 声の耳の底不ゆり。其日のうちふ家賊とてこく
 おさめ墨の衣不衣の涙をまぢり。三界無庵樹下石上のまぢり
 も行方定ひ生ゆぬ。あといふあ。まぢりやか。それ龍臺ふと
 邪嬭ハ五戒の一行びや。つまむべの要あり。あやう。一ふり。譚子が
 霊鬼此地ふらと。陰雨のとれ。いづは鬼火飄蕩として。まぢり。因縁

かゝる燃す暗夜の文ありぬ。遠く車の輻轳をし、眼をさす。被
車ふあひし者ハ三年をまじは命終るらむ。土俗がしをなし杉戸の
杜の鬼火乱橋の空車ある。二席の茶話どるうりる。途年うりる。
東福寺千人結制の師家象海和尚。岡東小杖をひたす。刻。地の不
進行やうく。土人の話説をゆめ。彈子。あつらへ。墓をさる。
一七日讀經ありし。太徳の教化ふりり。みらへ。え。奇怪
夏もあるしとまん語。え。え。え。何等物語めやう
る。を。の。巻をひらく。え。え。え。

霜夜星四卷 畢

は本屋に至る能き本。白子直守の祈

君は入可し

在伊豆大島元齋子下道

諸君

は

